



ピエール・ボエスチュオー研究（５）
『驚異の物語集』 １

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016885

ピエール・ボエスチュオー研究（５）

『驚異の物語集』 １

鍛 治 義 弘

『驚異の物語集』 *Histoires prodigieuses* はピエール・ボエスチュオーの第５番目の作品であり、生前最後に出版された。この集成は、バムフォース Bamforth によれば¹、1560年1月1日、イングランド女王エリザベス一世に写本²の形で献呈され、その後ボエスチュオーは章を付け加え、同年6月18日に刷了し、これまでボエスチュオーの作品を出版してきたヴァンサン・セルトナ他の書肆から刊行された³。好評を博したようで、世紀末までに25版以上が出版された⁴が、さらに1568年にクロード・テスランのものが付け加えられたのを始め、その後ベルフォレ、ロド・オワイエ、ベルフォレ訳のアルノー・ソルバンのもものが次々と付加され、1598年にはI.D.Mなる者のものも加わり『驚異の物語集』は全6巻にまで膨れ上がる。ボエスチュオーの作品が嚆矢となり、驚異の物語集という一つのジャンルを作り上げるまでになった。また1569年にフェントン E.Fenton による英訳⁵が出版され、その後スペイン語訳、オランダ語訳も出版された⁶。まさしくボエスチュオーの代表作と言えるだろう。

¹ Pierre Boaistuau, *Histoires prodigieuses* (édition de 1561), édition critique par Stephen Bamforth, Texte établi par Stephen Bamforth et annoté par Jean Céard, Droz, 2010, <Introduction>, p.98. 以下『驚異の物語集』への言及、この作品からの引用は、他の指示がない場合、この版により、HPと略す。

² この写本は長い間行方が知れなかったが、近年ロンドンの Wellcome Library for the History and Understanding of Medicine に所蔵されていることが判明し (western ,ms.136)、*Histoires prodigieuses MS 136 Wellcome Library*, sous la direction de / edited by Stephen Bamforth, Milan, Franco Maria Ricci, 2000 として出版された後、現在では同ライブラリーのホームページで公開されている。

³ HISTOIRES / PRODIGIEVSES / LES PLVS MEMORABLES QVI /AYENT ESTÉ OBSERVÉES DEPVIS LA / Natiuité de Iesus Christ, iusques à nostre siecle : Extraictes / de plusieurs fameux auteurs, Grecz, & Latins, sacrez & prophanes : mises en nostre langue Par P. Boaistuau, surnommé / Launay, natif de Bretagne, avec les pourtraictz & figures .

A PARIS / Pour Vincent Setenas Libraire, demourant en la rue neuue nostre Dame, / à l'enseigne S. Iean l'Evangeliiste. Et en sa boutique au Palais, / en la gallerie par ou on va à la Chancellerie. / MD.LX. / AVEC PRIVILEGE DV ROY. フランス国立図書館蔵で、gallica 上で公開されている電子テキストによる。コロフォンに「Annet Briere 印刷、1560年6月18日刷了」との記述がある。ヴァンサン・セルトナ版以外に、同じ版が、ジャン・ロンジスとロベール・ル・マニエ、エチエンヌ・ゲルローからも刊行された。

⁴ Cf. HP, p.277-324.

⁵ Certaine Secrete / wonders of Nature, con-/taining a description of / sundry / strange things, seming monstrous / in our eyes and iudgement, bicause we / are not priuie to the reasons / of them. Gathered out of diuers learned authors / as well Greeke as Latine, sacred as / prophane. By E. Fenton / Apres fortune espoir. Imprinted at London, by / Henry Bynneman dwelling in Knight-/rider streat, at the signe of the / Mermaid. /ANNO 1569.

⁶ Cf. HP, p.324-329.

この書に対して私たちはこの論文で次の三つのことを解明しようと試みる。まず第一に、この書は驚異としてさまざまな事象を記述しており、怪物（奇形〔まれな形〕、怪物人種、幾つかの種の混合）、天変地異（地震、洪水、噴火、彗星、空の異常）、博物学的対象（宝石、動物、植物）その他にまで渡るが、驚異とは何かが明瞭ではない。それゆえまず驚異の定義、輪郭を定めることが必要となろう。

次にボエスチュオーは緒言で、「私は驚異の理由を説明したが、これは私以前にだれによってもなされたのを私はまだ見ていない」⁷と言明しているので、その説明の特徴を把握しよう。

最後に集成としての構成を考えてみたい。この物語集は、先述の様々な驚異が章を立てて並べられているが、一見したところ何の関連もなく並んでいるようにも見える。そこに何か意図した配列があるかを検討しよう。

さて本論に入る前に、怪物を中心に検討した書もあり⁸、ごく一部の翻訳⁹もあるとはいえ、まだまだ日本ではなじみのない作品であるから、内容を概観しておこう。しかし、驚異としてまとめられるとはいえ、何分多岐に渡る事柄を扱っており、概略を見るだけでも、多くの頁を費やさなくてはならないので、章のタイトルを一覧表にすることであらましを提示しよう。

1560 年版	写本
(1) サタンの驚異	(1) サタンの驚異的物語
(2) 人々を改悛に仕向けるためにエルサレムの町に派遣された驚異と神の警告	2 エルサレムの町についての驚異的な警告
(3) 何人もの王、王侯、高位聖職者、皇帝と君主の驚異的死	3 何人もの王、君主の驚異的死
4 怪物的王の驚異 それにより命令するもの、そして国家の管理をする他の者がどんな危険にあるかが示される	4 怪物的王の驚異 それにより命令するもの、そして国家の管理をする他のものがどんな危険にあるかが示される
5 怪物的出産とその生成の原因について	5 哲学者の最も共通する意見による、怪物と驚異の生成の原因 この題材の記憶すべき幾つもの例
6 怪物の生成の一般的な理由とこの同じ主題に関する幾つもの記憶すべき物語	6 私たちの時代の、結合した二人の娘の物語
7 私たちの時代の恐ろしい怪物の驚異、その論説について悪魔は自然の作品を生み行使できるかについて、問題が決定される	7 私たちの時代に生まれた恐ろしい怪物の驚異 悪魔は懐胎することができるかの問題の決定

⁷ HP, p.346 <<mesme ay rendu la raison des Prodiges, ce que je n'ay encores observé avoir esté faict d'aucun avant moy.>>

⁸ 伊藤進、『怪物のルネサンス』、河出書房新社、1998、特に 318 - 333 頁。

⁹ 平野隆文訳、『驚倒すべき物語』、『フランスルネサンス文学集 2』、白水社、2016、183 - 198 頁。

8 稲妻、雷鳴、そして嵐の不可思議な驚異 私たちの時代に起こったことの例	8 私たちの時代に起こった稲妻と嵐の不可思議な驚異
8 溶けた鉛で顔と手を洗った、私たちの時代の男の驚異的物語	19 溶けた鉛で顔と手を洗った、私たちの時代の男の驚異的物語
9 ユダヤ人の驚異の物語	11 ユダヤ人によって磔にされた若い子供
10 驚異的な大洪水と氾濫	23 洪水と氾濫で水の下に沈み溺れた幾つもの地域と地方
11 プリニウスの驚異的死 大地の幾つかの場所から出る炎の原因の短い描写	17 プリニウスの驚異的死 大地の幾つかの場所から出る炎の原因の短い描写
12 さまざまな地方に起きた、幾つかの恐ろしい地震の驚異 あるローマの騎士を策略で深遠に飛び込ませたサタンの幻覚	15 地震によって滅びた幾つもの壮麗な都市 あるローマの騎士を深遠に飛び込ませたサタンの幻覚
13 木の一つの幹の二つの接木のように、一緒に接がれた二つの体の驚異 これについて聖アウグスティヌスは『神の国』で言及する	9 木の一つの幹の二つの接木のように、一緒に接がれた二つの体の驚異 これについて聖アウグスティヌスは『神の国』で言及する
14 ある怪物の物語 聖ヒエロニムスが言及し、聖アンニウスに砂漠で現われた	10 砂漠で聖アントニウスに現われた怪物
15 宝石と、大地の胎内に見出される幾つもの不可思議なその他のことの驚異の物語	
16 不当に告発されたある王女の驚異 この女性たちは炎の激しさを、生きて免れた	27 火で損なわれ得なかった二人のキリスト教徒の王女
17 奇妙な幾つもの魚、海の怪物、ネレイデス、シレヌス、トリトン、海にいる他の水生怪物の驚異の物語	
18 キリスト教徒を食った犬の驚異	12 キリスト教徒の残酷な迫害と殺戮
19 人々の恐怖を伴って、空に現われたさまざまな凶形、彗星、ドラゴン、松明の驚異の物語 そこにそれらの原因と理由が指定される	20 地上のさまざまな地方の空に現われた驚倒すべき驚異
20 幾人かの人の頭から出た、炎の感嘆すべき物語	14 あるローマの騎士の感嘆すべき物語
21 驚異的な恋愛	
22 怪物の驚異的な物語 その腹からは頭を除いて、完全なもう一人の人間が出ていた	28 私たちの時代にフランスを駆け巡った怪物的男の肖像 その腹からは頭を除いて、完全な人間が出ていた
23 幾つもの植物の記憶すべき物語 あわせてそれらの植物と、ヘブライの作家ヨセフスの記述したバアラの驚異的な根の性質と効能	29 引き抜く者を死なせた、ヨセフスの記述した、驚異的な植物

24 ハネスベルゲンの森で1531年に捕えられた、人間の姿を持つ怪物の驚異的な物語 それについてゲオルギウス・ファブリキウスは、ここに描かれたように、実物から描かれた、像をゲスナーに送った	30 女を好んだ、人間の姿を持つ森で捕えられた怪物
25 驚異的な饗宴	22 驚異的な饗宴
26 驚異的な幻 夜、昼、覚醒時、睡眠時に現われる幽霊、幻覚、図像と幻想	24 驚異的な幻 夜に現われる幽霊、幻覚、図像、陰、類似の幻想 霊は戻ってくるかの問題の決定
27 カエリウス・ロディギヌスの見た怪物の驚異的な物語	25 カエリウス・ロディギヌスがイタリアで見た一方は男で他方は女の二つの怪物の驚異的な物語
28 腸と他の内臓の部分が露にむき出して見られる、生きた怪物	13 自然の奇妙な障害により腸が露にむき出して見られる生きて生成された若い子供の驚異的な物語
29 熊とイングランドのドッグから生まれ、ロンドンで作者が見た怪物的犬の驚異的な物語 この動物の本性に関するその他の記憶すべき話	
30 多数の子供を生んだ何人かの女性と、腹に死んだまま五年間自分の子供を抱いていた他の女性の驚異的な物語	16 腹に死んだ子供を五年間抱いていた女性の驚異的な物語
31 ジェノヴァとヴェネツィアが和解した日に生まれた怪物的子供の驚異的な物語	18 四つの脚と四つの手を持ち、ジェノヴァとヴェネツィアが和解した日に生まれた怪物的子供の驚異的な物語
32 何人かの現代人が書くように、アフリカでヴェネツィア人が買い、ついで防腐処置を施されてフランスに送られた怪物的蛇	32 ヴェネツィア人によって防腐措置を施され、フランソワ一世王に送られた蛇
33 驚異的な飢饉	31 驚異的で記憶すべき物語
34 足がなく、空中で生き、死んだときしか地上あるいは海にいない鳥の驚異的な物語	
35 いくつかの場所、一つはローマで、もう一つはヴェローナで見られた、背後の部分で結びつき結合した二つの双子の娘の驚異的な物語	21 怪物的で不具な子供に対する古代のギリシア人とローマ人の残酷さ
36 残酷さの驚異的な物語	26 キリスト教徒の残酷な災厄
37 臍から上は人間の姿で、残りは犬の地上に生きて生まれた怪物の驚異的な物語	
38 ドナウ川の貧しい人々を苛酷な税で巻き上げる風紀取締官の専制に対して、ローマの民会である怪物的人がなした甚だしい出訴	
37 [39] 食欲の驚異的な物語 この同じ主題に関する記憶すべき幾つもの例	

補足しておく、1560 年版および写本は第 1 章の章番号がなく、1560 年版は第 2 章、第 3 章の章番号も欠いている。また写本の第 19 章は 1560 年版では第 8 章の後に置かれたが、章番号は 8 であり、印刷版では第 8 章が二つある。以下では後のものを第 8 章 bis としよう。また 1560 年版の 38 章の次の章は章番号 37 となっているが、1561 年版以降は第 39 章と訂正された。こうしたことは、初版が急いで仕上げられたことを示していよう。

本論に入る前に、後の分析のためにも、こうしたさまざまな事象を分類しておくことは有益であろう。チボー・カテルは、1. 超自然の驚異（神あるいは悪魔）、2. 自然の驚異（雷、地震、宝石）、3. 人間と動物の怪物、4. その他、に分類し、それぞれの章を割り当てた¹⁰。しかしこの分類は二重に分類される章を含むので、私たちは次の分類を提示したい。

1. 人間の怪物（奇形（異常出産児）、怪物人種）
 - 5、6、7、13、14、22、24、27、28、31、35、37、40 章
2. 博物誌（動物、植物、鉱物の途方もないもの）
 - 15、17、23、29、32 章
3. 天変地異（四大（水－洪水、火－噴火、地－地震、空気－雷）、彗星など）
 - 8、10、11、12、19 章
4. その他
 - 1、2、3、4、8 bis、9、16、18、20、21、25、26、30、33、36、38、39 章

上の一覧表が示すごとく、まことに多様な事象がこの集成に驚異として集められているが、ボエスチュオーは、例えばアンブロワーズ・パレのように¹¹、驚異とは何かを、明確に定義してはいない。しかし何らかの輪郭を驚異の語に与えていると思われ、ジャン・セアールはそ

¹⁰ Thibault Catel, <Du présage à la merveille L'exemplarité contrariée dans les *Histoires prodigieuses* de Boaistuau>, in Jean-Claude Arnould (sous la direction de), *Les Histoires tragiques du XVIe siècles Pierre Boaistuau et ses émules*, Classiques Garnier, 2018, p.146-147. 1 6（1、2、3、7、12、26 章）；2 8（8、10、11、12、15、18、19、23 章）；3 23（人間の怪物：5、6、8 bis、9、13、14、20、22、27、28、30、31、35、37、38、40 章；動物の怪物：17、34、29、32、34、37、40 章）；4 9（3、4、16、17、21、25、33、36、39 章）

¹¹ パレはその『怪物と驚異について』*De Monstres et Prodiges* の序文で次のように述べている。<< Monstres sont choses qui apparoissent outre le cours de Nature (et sont le plus souvent signes de quelque malheur à advenir) comme un enfant qui naist avec un seul bras, un autre qui aura deux testes, et autres membres, outre l'ordinaire. Prodiges, ce sont choses qui viennent du tout contre Nature, comme une femme qui enfentera un serpent, ou un chien, ou autre chose du tout contre Nature, comme nous monstrerons cy apres par plusieurs exemples d'iceux monstres et prodiges :>> Ambroise Paré, *Le Vingtcinquisme Livre, traitant des Monstres et Prodiges*, in *Les Œuvres*, Volume III, Classiques Garnier, 2019, p.2704

「怪物とは自然の〔通常の〕流れを越えて現われるもので、腕が一つで生まれる子供、あるいは頭が二つの子供、また通常以上の手足を持つ子供の類で（大抵来るべき不幸の徴である）。驚異とは自然に反するもの全体から出来するもので、蛇、あるいは犬、あるいは自然に反するもの全体を産むような女の類で、以

れを「稀少性」raretéに求めた¹²。頻度が少なく同時に注目に値するというこの語の16世紀の意味を含んで、ボエスチュオーは稀少な出来事を驚異と捉えたとするのである。けれどもセアール自身の論の進め方からしても、この捉え方では不十分ではないかと思われる。そもそもセアールはこの集成で「驚異的」prodigieuxという語が、他の形容詞と共に頻繁に用いられることから、驚異の意味と限界と定義する検討を始めていた¹³。そうした形容詞は、「怪物的」monstreux、「奇跡的」miraculeux、「奇妙な」estrane、「驚嘆させる」esmerveillable、「不可思議な」merveilleux、「感嘆すべき」admirable、「記憶すべき」memorableなどであるが、そこから「稀少性」だけを引き出すのは十分ではあるまい。なによりこうした形容詞（なかでも多用されるのは「奇妙な」と「感嘆すべき」である）で驚異を形容するのは、ボエスチュオーが出来事の性質や原因によってではなく、ダストンとパークがアクィナスについて指摘したように¹⁴、その出来事に対する主観的情動によって驚異を特徴づけようとしたからではないか。ボエスチュオーはまずジャン・ド・リユーへの献辞で次のように述べ、驚異のもたらす感覚、感情に注意を向けていた。

「天の凹みの下で眺めうるすべてのことの中で、怪物、驚異、見るも恐ろしいものほど、人間精神を目覚めさせ、感覚をより奪い、よりぞっとさせ、被造物により大きな感嘆あるいは恐怖を生み出すものは、何も見られません。」¹⁵

さらに緒言では特に稀少性、奇妙さ、感嘆に焦点をあて、次のように驚異の輪郭を示唆しているように思われる。

「読者よ、私たちの驚異の論にさらに入り込む前に、稀で、奇妙で、感嘆すべき、そして私の主題に合う何らかのことを発見しうるかを探すために、私は幾人もの作家を拾い読みするのに満足しなかったとあなたに私は注意しておきたい。」¹⁶

稀少性から恐らく派生する「奇妙な」と、「感嘆すべき」という主観的情動による驚異の輪郭付けは本文の中でもしばしば現れ、次のような表現まで見られる。

下に幾つものこうした怪物と驚異の例によって私たちは示すだろう。」

尤も、パレはこの直後に「不具」mutiléの区分を導入し、ジャヌレの指摘するように、怪物／驚異の二区分を麻痺させてしまう。Cf, Ambrose Paré, *Des monstres et prodiges*, Gallimard, <folio classique>, 2015, Préface, p.16.

¹² Jean Céard, *La nature et les prodiges, L'insolite au XVIe siècle*, Droz, 1996, p.256.

¹³ *Ibid.*, p.254.

¹⁴ Lorraine Daston & Katharine Park, *Wonders and the Order of Nature, 1150-1750*, Zone Books, © 1998, p.122. <<The centrality of wonder to this set of questions appear clearly in the discussion in Aquinas' *Summa contra gentiles*, which focused not on the objective criterion of rarity but on the subjective passion of wonder:>>

¹⁵ *HP*, pp.333-334 <<entre toutes les choses qui se peuvent contempler soubz la concavité des cieulx, il ne se voit rien qui plus éveille l'esprit humain, qui ravisse plus les sens, qui plus espovente, qui engendre plus grande admiration, ou terreur aux creatures, que les monstres, prodiges et abhominations>>

¹⁶ *HP*, pp.345-346, <<Lecteur, avant que penetrer plus avant en noz discours prodigieux, je te veux advertir que je n'ay pas esté content de fueilleter plusieurs autheurs, pour rechercher si j'y pourrois trouver quelque chose de rare, estrange, admirable et conforme à mon subject :>>

「多くの殉教者と良き人のこうした犠牲は、奇妙で感嘆すべきである。しかしコルネリウス・タキトゥスを書くものは驚異的で、世界の最も有名な怪異と怪物的なことの中に入れられるに値する。」¹⁷

この文から理解されるのは、「奇妙で」「感嘆すべき」情動の、いわば最上級が「驚異的」と捉えられていることである。従って、ボエスチュオーはこの集成の中で、稀で途方もない多様な物事に対して、人が抱く特に「奇妙な」と「感嘆すべき」という情動が、驚異を構成すると考えていると思われる。

次に驚異の原因の説明を検討しよう。この集成でこうした説明が豊富になされるのは、第5章怪物の生成、第19章彗星など特異な天体・気象現象、第26章幻の原因に関してである。順に見ていくことにしよう。

まず第5章では怪物の生成に関する説明がなされるが、ボエスチュオーがここで問題としたのは、人間の奇形、異常出産の原因である。ここでのボエスチュオーの説明は、人間と他の動物の混合した怪物には適用されるだろうが、他の動物の怪物の生成には、とりあえず触れていない。その第一の原因をこの作者は次のように述べる。

「たいていこれらの怪物的被造物は神の審判、正義、懲罰、そして呪いから生じる、神は、その罪を忌み嫌い、父母がこのように唾棄すべきものを産むのを許されるが、父母が、欲望が導く野獣のように、年齢、場所、時間あるいは自然の命じた他の法を尊重せず守らず、無頓着に身を投じるからである。」¹⁸

父母の淫蕩な欲望に対する神の懲罰、呪いとして奇形が生まれるという、現代の私たちには、信じがたく、認め難い原因を第一に挙げている。しかし、聖書の「ヨハネによる福音書」6章の盲人の例を引いて、奇形は神の怒りだけではなく、「神の御業が現われるため」<afin que les œuvres de Dieu fussent manifestées> (HP, p.387) ともしている。

次にボエスチュオーはアリストテレス、ヒポクラテス、ガレノスらの権威を引いて、想像力 <imagination> (HP, p.387) を挙げ、さらにより具体的に、精液の過剰、欠陥、腐敗、子宮の不具合 <la superabondance ou defaut et corruption de semence, ou (...) l'indisposition de la matrice> (HP, p.388) も原因とし、これは エンペドクレスらの意見だという。さらにアルチャーチにより、星辰 <astres> (HP, p.389) に原因を帰すものもいるとする。また妊婦が食する、汚れた汚い食糧の腐敗 <la corruption des viandes ordes et sales> (HP, p.389) も原因となるとする。この中では、当時と現代の医学的理解は相当な開きがあるものの、私たちが納得できるものも含まれる。

¹⁷ HP, p.498 <<Tous ces sacrifices de tant de martyrs et gens de bien, (...) sont estranges et admirables : mais celui qu'écrivit Cornelius Tacitus est prodigieux, et digne d'estre mis entre les plus celebres portentes et monstres du monde :>>

¹⁸ HP, p.385 <le plus souvent ces monstrueuses procedent du jugement, Justice, chastiment, et malediction de Dieu, lequel permet que les peres et meres produisent telles abhominations, en l'horreur de leur peché, par ce qu'ilz se precipitent indifferemment, comme bestes brutes où leur appetit les guide, sans respect ou observation d'aage, de lieu, de temps, ou autres Loix ordonnées de nature>

最後に人為的怪物 <Monstres artificielz> (HP, p.390) がいるとされ、乞食などが子供が生まれるやその手足を砕くなどの例が挙げられる。

なお、第7章で悪魔は「交接することができるとしても、しかし精子を持たず、産みだすことはできない」¹⁹とされるので、ボエスチュオーにおいては、悪魔は怪物の原因ではない。

このように述べられた原因は、超自然、自然、人為に区別されよう。すなわち最初の二つは神によるものであり、これは自然を超えている。次の四つのうち二つは、先に見たように、細かな点は別にして、現代でも自然科学的原因として想定しうるものであるから、自然的原因とするのに何ら問題はないだろう。残る二つの想像力と星辰は、現代の科学的知見からすれば、自然科学的とは、とうてい認め難いが、こうした原因が考えられるとして、少なくとも、神により直接的になされるのではないとの意味において、自然的原因としてまとめることができよう。

なお、ダストンとパークが、アキナスの『対異教徒大全』第3巻第99章に基づいて行う区別、*praeter naturam*, *preternatural*「自然の通常の歩みの外」²⁰は、リュコステネスやパレも言及しているが²¹、ボエスチュオーは、先に見たように、驚異が稀であることは頻繁に繰り返すも

¹⁹ HP, p.403<combien que les malings espritz puissent coïr, que toutesfois ils n'ont point de semence, et ne peuvent engendrer>

²⁰ Daston & Park, *op.cit.*, p.121. *Divi Thomae Aquinatis Summae Contra gentiles*, libri quatuor, J.-P. Migne, 1863, Caput XIXC, col.773-774. <ordo enim inditus rebus a Deo, secundum id est quod in rebus frequenter accidere solet, non autem ubique, vel secundum id quod est semper. multa enim naturalium causarum effectus suos producunt eodem modo ut frequenter, non autem ut semper, nam quandoque, licet ut in paucioribus, aliter accidit, vel propter defectum virtutis agentis, vel propter materiae indispositionem, vel propter aliquod fortius agens; sicut cum natura in homine generat digitum sextum, non autem propter hoc deficit, aut mutatur providentiae ordo: nam et hoc ipsum quod naturalis ordo institutus secundum ea quae sunt frequenter, quandoque deficiat, providentiae subest divinae. si ergo per aliquam virtutem creatam fieri potest ut ordo naturalis mutetur ab eo quod est frequenter, ad id quod est raro, absque mutatione providentiae divinae; multo magis divina virtus quandoque aliquid facere potest sine suae providentiae praeiudicio, praeter ordinem naturalibus inditum rebus a Deo.>「神によって事物に置かれた秩序は頻繁に事物に起こる習慣であるものに基づくが、いたるところではなく、常に起こることに基づくわけではない。事実多くの自然の原因はその結果を同じように頻繁に生じさせるが、常にではない。とういうのは時に、少数のものにおいて、異なっており起こることがありえ、作用因の欠如や、質料の不適や、何かより強い作用因による。ちょうど自然が人間に六本目の指を生むようにである。しかし摂理の秩序はこれにより欠けたり、変化することはない。自然の秩序は、頻繁であることにしたがって構成され、時に欠けるとしても、神の摂理のもとにあるということそのものによってである。したがって、創造された何らかの力により、自然の秩序が、頻繁であるものから、稀であるものに、神の摂理の変化なしに、変ることが起こりえるなら、神の力は、摂理の予断なしに、神によって自然の事物におかれた秩序の外に、よりいっそう、時に何かを創りうる。」; Saint Thomas Aquinas, *Summa contra gentiles*, Book Three: Providence Part II, translated with an Introduction and Notes by Vernon J. Bourke, University of Notre Dame Press, © 1956, pp.78-79.

²¹ リュコステネスの『驚異と怪異の年代記』の正式なタイトルは「原初から私たちの時代に、世界の土層と下層で、自然の秩序、動き、作用の外で起きた、驚異と怪異の年代記 こうした種類の怪異は偶然におきるのではなく、人類に示され、世界の大変化同様人類の罪に対する神の厳しい仕打ちと怒りを予告する...」*PRODIGI/ORUM AC OSTENTORVM / CHRONICON / quae praeter naturae ordinem, motum, / ET OPERATIONEM, ET IN SVPERIO-ribus & his inferioribus regionibus, ab exordio mundi usque ad haec / nostra tempora acciderunt. Quod portentorum genus non temere evenire / solet, sed humano generi exhibitum, severitatem iramque Dei adversus scele-/ra, atque magnas in mundo vicissitudine portendit. ...*である。Bibliothèque interuniversitaire de médecine 蔵で gallica を通じて公開されている電子テキストによる。パレについては前掲の怪物と驚異についての違いに関する引用を参照。

の、特にこの区別を持ち出さない。それゆえ、自然と「自然の通常の歩みの外」を区別せずに、自然の原因としてまとめていると考えられる。

また奇形の原因については、新しく付加された第31章にも、追加されており、これらは、いずれも自然の欠陥、欠如 <vice, default> (HP, p.666) とされる²²。

第19章の彗星など特異な天体・気象現象の原因の説明では、ボオエスチュオーは、「それゆえ私たちが空に見る異様な炎と他の図は自然であるのは確かであり、次のように形成される」²³として、ポリドロ・ヴィルジリオに基づいて²⁴、三つの域からなる空域の最も高い域に、太陽によって熱せられた発散という蒸気がそこで燃えて、彗星などが形成されると説明する。やはり私たちには首肯しがたいものであるが、自然な原因であるとしていることだけを押さえておこう。複数の太陽が見えることの説明は、雲に光が反射するとの、より認め易いもので、同様に自然な原因とされる。

ボエスチュオーがこれら天体・気象現象を自然の原因に帰すのは、実は、一つの目論見があったことで、それは判断占星術を批判するためであり、次のように明確に述べている。

「それゆえ今後は判断占星術師の支離滅裂な話、予言、虚偽に留まらないで、物事の原因本質を自然に探そう」²⁵

さらに他の天変地異の原因もボエスチュオーは自然なものとしている。第8章の雷は空気の中に入りこむ湿った蒸気によって引き起こされ (HP, p.409)、第11章の噴火は硫黄、明礬、瀝青、水が原因で (HP, p.434)、「そして山からでる酷い絶えざる炎については、その原因は、私たちがすでに述べたように、自然なものである」²⁶と明確に述べられ、第12章の地震は地中

²² 具体的には、子宮の狭窄 <l'angustie du lieu trop estroit en la matrice> (HP, p.667)、遺伝病 <les maladies hereditaires> (HP, p.667)、母体の打撲・傷 <contusion ou blesseure> (HP, p.667)、母胎での胎児の病気 <malade au ventre de sa mere> (HP, p.667)、栄養が子宮外に流れること <le nourricement (...) soit escoulé hors de la matrice> (HP, p.667) である。これら怪物生成の原因はほぼパレに受け継がれた。Cf. Ambroise Paré, *Le Vingt-cinquième Livre, traitant des Monstres et Prodiges*, in *Les Œuvres*, Volume III, Classiques Garnier, 2019, p.2705 ; 伊藤進訳、『怪物と驚異について』、『フランス・ルネサンス文学集1』、白水社、2015、390頁。

²³ HP, p.510 <Il est doncques certain que ces flammes fantastiques, et autres figures que nous voyons au ciel, sont naturelles, et se forment en la maniere qui s'ensuyt.>

²⁴ Iulii Obsequen-/TIS PRODIGIORUM LI-/ber, ab Urbe tondita usque ad Augustum / Caesarem, cuius tantum extabat Fragmentum, nunc / demum Historiarum beneficie, per CONRADVM / LYCOSTHENEM Rubeaquensem, inte-/gratati suae restitutus. / Polydori Vergilij Vrbinate / de Prodigijs libri III. / Ioachimi Camerarij Paberg. De Ostentis libri II. / BASILEAE / (colphon) BASILEAE, EX OFFICINA / Ioannis Oporini, Anno Salutis huma-/nae, M.D.LII. Mense / Marito. p.228 ヘント大学図書館蔵で google 上で公開されている電子テキストによる。以下ヴィルジリオへの言及はこの版により、合刊本と略する。;cf. Iules Obsequen des / Prodiges. / PLVS / Trois Liures de Polydore / Virgile sur la mesme / matiere. / Traduis de latin en François / par George de la Bouthiere / Autunois. / A LYON / PAR IAN DE TORNES, M.D.LV. / Avec Priuilege du Roy. pp.263-264 オーストリア国立図書館蔵で google 上で公開されている電子テキストによる。

²⁵ HP, p.513 <Cherchons doncques desormais en nature les causes et essences des choses, sans nous arrester aux fripperies, prestiges et mensonges des Astrologues judiciaires>

²⁶ HP, p.436 <Et quant aux flammes hideuses et perpetuelles qui sortent de la montaigne, la cause, comme nous avons ja dict, est naturelle :>

に閉じ込められた蒸気によるとして、いずれも自然的な原因とされる。ただ雷については、悪魔の働きも認めている (HP, p.409)。

第26章はさまざまな幻を扱い、1560年版では32頁以上にもなる、この集成で最も長い章であり、いくつもの例が語られ、叙述はかなり錯綜している。ボエスチュオーはまずウァレリウス＝マクスィムスによって二人の古代アルカディア人の場合を始めとしていくつかのまぼろしの例を挙げた後、タラントの司教カタルドが若い子供に現われ、自分の書いたナポリ王フェルディナンドに宛てた書物を探すように言った逸話を詳しく物語る。その後こうした話に現われる幻を、アウグスティヌスは天使の働きに帰していたと結論する²⁷。しかし同様にアウグスティヌスの言うように悪霊の幻想に欺かれることもあるとして²⁸、ポイツァーの挙げるボローニャの乙女とパヴィアの魔法使いの女の例、さらにカルダーノによってミラノの女についていた霊を提示する。このあとソクラテスのダイモンに話が及ぶが、これについては判断を保留している。

さらに別の種類の幻に話題は移り、体液の腐敗 <par corruption d'humeurs> (HP, p.621)、想像力の不具合 (<par indisposition de l'imaginative> (HP, p.621)、他の自然の不具合 (<par quelque autre infirmité de nature> (HP, p.621-622)、毒を飲んだこと <avoir mangé quelques venins ou poisons> (HP, p.622) による幻があるとされ、このうちの二つは現代的に解釈すれば、精神疾患や薬物による幻覚ということになろう。つまり自然の原因であり、さらに「自然学者によれば自然の原因によって生じうる他の幻」 <d'autres visions, lesquelles selon les Phisiciens se peuvent faire par causes naturelles> (HP, p.623) もさらに存在するとして、こだまの例を、カルダーノの『精妙さについて』によって、王侯の顧問秘書官がこだまにより川を彷徨った話を語る。

最後に人為的幻 <visions artificielles> (HP, p.627) もまた存在するとして、カルダーノの『事物の多様性について』によりスコットランド王が諸侯を幻によって偽ってピクト族との闘いに赴かせた由来を語る。

こうして幻の原因も、先の怪物の原因と同じように、超自然的なもの、自然的なもの、人為的のものに区別され、この区別の枠組みがこの集成全体に適用されると思われる。この区別の中では、自然的な原因が多くを占める。こうした説明は、ボエスチュオー自身が考え出したものではなく、過去と同時代の権威によるものではあるが、驚異を超自然と結び付けていた、従来の解釈から、一歩踏み出したものである。

さらにこうした原因の区別は、驚異と関係していた徴や予言にも大きく影響することになる。

周知のように、そしてボエスチュオー自身も指摘するように、驚異は古代から、なにごとか

²⁷ HP, p.603 <Ces visions doncques se font (dit-il) par l'operation des anges, ausquelz il est permis du seigneur, ou commandé de ce faire.> 「それゆえこれらの幻は天使の働きでなされ、天使は主によってそうすることが許され、あるいは命じられている、とアウグスティヌスは言う」

²⁸ HP, p.604 <Quelque-fois aussi nous sommes deceuz par les illusions des espritz malings, comme saint Augustin enseigne> 「時々また私たちは、聖アウグスティヌスが教えるように、悪霊の幻想に欺かれる」

の徴、吉凶の予兆として広く解釈されてきた。ボエスチュオーもこの書の出だしではその轍をなぞる。例えば、第2章では次のように言明されていた。

「私たちの神は、私たちが無数の呪うべき罪により傷つけたにも拘わらず、しかし私たちに手を差し伸べ、あるときは病と他の特別な不幸で、時に徴驚異で、自分のもとに戻るよう、私たちを呼び、説き、誘われ、徴、驚異はたいてい神の正義の魁、喇叭、前兆であり、それはこの惨めなエルサレムの町で明瞭に示されたとおりで、」²⁹

この後にフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦記』から引いた出来事が語られる。すなわち彗星が一年間続き、寺院の重い扉がひとりでに開き、空には荷車や軍隊の像が現われ、そして何より農民の子が7年5ヶ月間エルサレムの不幸を叫び続けた。そして最後に皇帝ティトゥスによりエルサレムは破壊された。つまりこれらの驚異は神の怒りの徴と見なされるとするのである。

第3章では、王侯高位聖職者の失墜は、神の怒りの矢と判断を感じるものとして、「神の正義が私たちの罪に対して燃え上がり、私たちの悪徳に対して怒りの矢を放たれるとき、弱く唾棄すべき動物が、私たちに準備される苦痛の死刑執行人、執行者、代行者であることを私たちは教えられる」³⁰と指摘され、ポーランド王ポピエルとマインツの大司教ハトが鼠により死に至った次第が語られる。第5章では、既述のように、怪物の最初の原因は、神の審判、正義、懲罰、呪いから生じるとされていた。

このように、驚異はもっぱら神の怒りの徴と捉えられていたが、第6章からは少し様子が変わる。この章では、古代人は、怪物を禍の予言あるいは予兆としてきたが、「私たちは（…）人間的に扱い、神の被造物と知っており、新生と聖なる洗礼の秘跡により教会に組み込まれるのを許す」³¹との宣言の後に、1495年9月誕生のビルシュタットの結合双生児の話が語られる。この異常出産はミュンスターを引いて、母体への衝撃が原因とされるが、出典となったリュコステネスの『驚異と怪異の年代記』³²とは異なり、徴、予兆には言及されない。

その後、第10章は聖書の洪水の話から始めるので、「懲罰」と最初に言明され、また先に述べたように、幻を扱う第26では、天使によるとされたカタルドの幻は、ナポリ王国の運命を予言するものとされた。しかし、その他の章では、後に検討するもの除いて、こうした言及はほ

²⁹ HP, p.366 <nostre Dieu, lequel i'açois que l'ayons offensé par une infinie multitude d'exécrables pechez, neantmoins il nous tend sa main, nous appelle, admoneste et convie de retourner à luy, ores par maladies et autres particulieres afflictions, quelquefois par signes et Prodiges, qui sont le plus souvent les heraulx, trompettes et avant-courures de sa justice, comme il est evidentement monstré sur ceste miserable cité de Hierusalem>

³⁰ HP, pp.374-375 <nous sommes instruictz que lors que la justice de Dieu s'enflamme contre noz pechez, et qu'il foudroye les fleches de son ire contre noz vices, les pusilles et abjectz animaux sont les bourreaux, executeurs et ministres de la peine qui nous est preparée>

³¹ HP, p.393 <nous (...) les traictons plus humainement, et cognoissants que sont creatures de Dieu, les souffrons estre incorporez à son eglise par la regeneration, et sacrement du saint baptesme>

³² Lychostenes, *op.cit.*, p.504-505. リュコステネスは同年のトルコ軍の召集とヴォルムスでのドイツ防衛協議に言及している。

ばなくなる。雷、噴火、地震などを自然的原因とするのであるから、予言的意味を失うのはある意味当然ではあろう。

こうして自然的原因の驚異と徴、予兆との関連は等閑に付されるようにも思われるが、ボエスチュオーの場合、ことはそう単純ではない。以下では人間の怪物（奇形、異常出産）の場合をやや詳しく検討しよう。異常出産、ことに結合双生児はリュコステネスにおけるのと同様ボエスチュオーでも頻繁に登場する驚異で、先の第5章のビルシュタットの結合双生児、第6章のいわゆるクラクフの怪物から、最終第40章のラヴェンナの怪物まで、十数例を数える。先述の如く、第5章のビルシュタットの結合双生児に関しては、徴、予兆への言及はなく、これは第6章のクラクフの怪物から第27章のバヴァリアで見られた結合双生児まで同様である。しかし第28章のガルバとスカウルスが護民官であった時代（リュコステネスによれば106年）の内臓が透けて見えた胎児については、ユリウス・オブスキュスにユグルタに対して得た勝利の前兆予言とした、との言及がある。尤もここでは古代の習慣を述べただけと解されないこともない。

第31章では、リュコステネスに基づいて、1389年ジェノヴァとヴェネツィアが和解をしたときに生まれた結合双生児について語られ、ヒポクラテスにより異常出産の自然的原因が挙げられた後、この結合双生児の原因は子宮の狭窄に帰せられる。そしてその後に、この結合双生児は、ヴェネツィアとジェノヴァが和解したその日に誕生したこと、同じ年に、オーストリア大公がスイス人に打ち負かされて死んだこと、ベルナボの死後、ガレアツォがミラノ子爵の位を与えられたことが、リュコステネスと同様に³³（リュコステネスの名は挙げられない）、付け加えられる。あたかもこの誕生があとの三つの出来事の予兆であるかのように読まれる。しかし、これには問題がある。まず、パレの『驚異と怪物』で同じ結合双生児が扱われる箇所にはセアールが付した注³⁴によれば、ジェノヴァとヴェネツィアの和解は1381年であり、オーストリア大公レオポルトの戦死は1386年である。またジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティがベルナボを襲撃したのは1385年で、ミラノ公になったのは1395年であり、リュコステネスの記述は三つとも年代が誤っている。ボエスチュオーはリュコステネスの記述を誤っているとは思わず、自動的に引き写してしまったとも考えられるが、穿ってみれば、予兆の過ちを示すために、あえて書き写したと取れないこともない。

第35章では1475年ヴェローナで生まれた結合双生児と1493年ローマで見られた結合双生児が話題になる。ヴェローナの結合双生児については、「この怪物は諸地方の不可思議な変化を示し予言したと書いたものもいた」³⁵と述べられ、リュコステネスの名を挙げずに、リュコステネスの言及した六つの予兆³⁶の内、イングランド王がフランス王ルイと和解したなどの四例を引く。ローマの結合双生児に関しては、リュコステネスも扱っているが³⁷、その名は挙げずに、「こ

³³ Lychostenes, *op.cit.*, p.468-469.

³⁴ Ambroise Paré, *De Monstres et Prodiges*, édition critique et commentée par Jean Céard, Droz, 1971, p.p.163-164, n.51.

³⁵ *HP*, p.703<Aucuns ont écrit que ce monstre, (...) montra et predist de merueilleuses mutations par les provinces>

³⁶ Lychostenes, *op.cit.*, p.490.

³⁷ Lychostenes, *op.cit.*, p.501.

れと同様の怪物が、教皇アレクサンドル六世の時代に生まれ、(ポリドロが書くように)この教皇在位期間に出来る悪、災厄、悲惨を予想した」³⁸と書いて章を締めくくる。確かにヴィルジリオは1493年ローマで生まれた怪物について、ポリドルスの口を借りてこうした内容を述べている³⁹が、リュコステネスは、ヴェルジリオの名は挙げずに、その予言を一文字も変えずに、書き写している。

第37章では臍から上が人間で残りは犬の姿をした怪物が扱われ、ウォラテラスが書いているとする。またリュコステネスによって犬と人間が背中にくっついて生まれたとも記す。前者について、セアールはパレの『怪物と驚異』に付した注ではウォラテラスの1506年初版の書の1603年版の当該部分を挙げていた⁴⁰が、ボエスチュオーの書のこの箇所の注では、ウォラテラスの記述するものも、リュコステネスが記載していることを指摘し⁴¹、ボエスチュオーが二つの怪物ともリュコステネスから引いたのではないかと示唆しているように思われる。ともかく両者は獣姦という人間の淫蕩が原因であるとされ、パウロが「エフェソの信徒への手紙」で言うように、「淫蕩者の罰は、神に見捨てられ、全く見えず、良き助言を聞くことができず、自分たちに対する神の罰を引き起こす後で、盲目に陥り、気がおかしくなることだ」⁴²として章は締めくくられ、こうした半人半獣の怪物は神の怒りの徴として捉えられることになる。

最後の第40章はラヴェンナの怪物に費やされる。この有名な怪物についてはいろいろな問題があるが、ここでは徴、予兆に関することだけをとりあげよう。問題の一つはこの怪物の誕生の時期である。水野千依の書で指摘されているように、すでにイタリアで書かれた初期資料でも1511年と1512年の両記載がある⁴³。ボエスチュオーが参照したであろう書では、リュコステネスは1511年と、ルフは1512年と記している⁴⁴。ところでボエスチュオーは次のように書く。

「ヤコブ・ルフは、私がこの図を借りた、『人間の懐胎と生殖について』の書で、コンラドゥス・リュ

³⁸ HP, p.704 <un semblable monstre à cestuy fut engendré à Rome, (...), temps du Pape Alexandre vi. le quel (comme Polydore écrit) prognostiquoit les maux, playes et miseres, qui surviendrent du temps de son pontificat>

³⁹ 合刊版、p.239, <Quae sane podigia significarunt caedes, & flagitia, quae postea Alexandro sexto Romano pontifice facta sunt>「この驚異は、アレクサンデル六世がローマ教皇在位の間になされた殺害と恥すべき行為を意味した」

⁴⁰ Ambroise Paré, *De Monstres et Prodiges*, édition critique et commentée par Jean Céard, Droz, 1971, p.171, n.111.

⁴¹ HP, p.853, n.642.

⁴² HP, p.719, <La peine de paillards, c'est de tomber en aveuglement, et de devenir enragez, apres qu'ilz sont delaissez de Dieu, et ne voyent point, et ne peuvent escouter bons conseilz, et provoquent l'ire de Dieu contre eux.>

⁴³ 水野千依、『イメージの地層 ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』、名古屋大学出版会、2011、570 - 571 頁。水野の書のルカ・ランドッチの日記にある1511の日付は、この日記の邦訳の註(『ルカ・ランドッチの日記』、中森義宗・安保大有訳、近藤出版社、1988、36 頁、註(4))で説明されているように、キリスト受肉の日、3月25日を新年の始まりとする「受肉暦」によるもので、現行暦では1512年になる。

⁴⁴ Lychostenes, *op.cit.*, p.517; DE CONCEPTV / ET GENERATIONE HO-MINIS, ET IIS AVAE CIRCA / haec potissimum consyderantur, Libri sex, / congesti oppera IACOBI RYEFF / Chirurgi Tigurini. / CHRISTOPHORVS FROSCHO-VERVS EXCVDEBAT TIGVRI / ANNO M.D.LIIII. fol. 51 r°. バイエルン州立図書館蔵で、google 上で公開されている電子テキストによる。

コステネスは驚異論で、リュコステネスの引用するヨアンネス・マルチウァリスとガスパー・ヘディオは、1512年、教皇ユリウス二世がイタリアに多くの血なまぐさい悲劇を引き起こし、ルイ王と戦争を起した時代に、ラヴェンナの〔戦闘の〕日に、まさに（イタリアの最も古い都市の一つ）ラヴェンナで、頭に一本の角があり、二つの羽、獲物を攫う鳥に似た足、膝に一つの目のある怪物が生まれた、と書く。」⁴⁵

ここではボエスチュオーは大変率直だと思われ、図像を借りたルフとリュコステネスは直接に、マルチウァリスとヘディオはリュコステネスによって間接的に参照したと言っている。確かにリュコステネスには、怪物の解釈について、マルチウァリスの名とヘディオがこの怪物について書いた書物の箇所への言及はあるが、日付は紹介されていない。ところでボエスチュオーは直接参照したと思われるルフとリュコステネスの提示する誕生年のうちルフのものをを選び、さらにそれをラヴェンナの日当日としている。ラヴェンナの日が上記訳で括弧にいらして示したように、ユリウス二世のラヴェンナ占拠を期に、フランス国王ルイ十二世の軍勢と神聖ローマ皇帝軍がラヴェンナ郊外で壮絶な戦闘を繰り広げ、フランス軍が勝利した日とすれば、1512年4月11日のこととなる。しかし1512年とするルフも単に1512年とするだけで、日時までは確定していない。ユリウス二世とルイ十二世についてはルフはこの項目の最後に「他方それらはあのフランス王ルイによりユリウス二世教皇治世下のイタリアを荒廃させていた⁴⁶」と記すだけである。1511年とするリュコステネスはルイ十二世とユリウス二世の名前を出していない。このようにみればボエスチュオーは怪物誕生の日時を意図的にラヴェンナの戦闘の日として、ユリウス二世の暴政に結び付けていると思われる。

もう一つの問題はこの怪物の体の示す特徴の解釈である。体の各部分について幾つかの解釈があり、図像的にも興味深いが、ここでは二つだけを取り上げる。ボエスチュオーは次のように書いて、この章とこの書物全体を終える。

「とりわけ博学で著名な何人かの人は、(...) イタリアでこの時支配していたこれらすべての罪のために、イタリアはこうして苦しんでいた、と言っていた。

しかしイプシロンと十字架は二つの救いの徴であった。というのも、イプシロンは美德を意味し、イエス・キリストに改宗し、十字架を思いたいなら、それは、平和を回復し、主の怒りを鎮める本当の治療薬であったから。その怒りはその罪に対して燃えていた。」⁴⁷

⁴⁵ HP, p.738. <Jaques Rueff, en ses livres De conceptu et generatione hominis, duquel j'ay emprunté ceste figure. Conradus Licostenes en son traicté des prodiges. Joannes Multivallis et Gasparus Hedio qu'il cite, écrivent que l'an mil cinq cens douze, du temps que le Pape Jules second suscita tant de sanglantes tragedies en Italie, et qu'il eut la guerre avec le Roys Loys, à la journée de Ravenne, il fut engendré à Ravenne mesme (qui est l'une des plus anciennes citez de l'Italie) un monstre ayant une corne en la teste, deux aesles, et un pied semblable à celui d'un oyseau ravissant, et avec un œil au genoil;>

⁴⁶ Rueff, *op.cit.*, fol.51r°. <Fiebant autem haec Ludouico Gallorum rege sub Iulio 2. Pontifice Italiam uastante.>

⁴⁷ HP, p.738-739. <quelques hommes doctes et celebres, (...) lesquelz disoient (...) que pour tous ces pechez qui regnoient de ce temps en Italie, elle estoit ainsi affligé de guerres: mais quant à l'Ypsilon et à la Croix, c'estoient deux signes salutaires: car l'Ypsilon signifioit vertu, et puis la Croix, qui denotoit que s'ilz vouloyent se convertir à Jesus Christ, et songer à sa Croix, c'estoit le vray remede de recouvrer la paix, et moderer l'ire du Seigneur, qui estoit enflammée contre leurs pechez.>

諸家の意見としてこの怪物の体の特徴が、ユリウス二世時代のイタリアが罪のために戦争で苦しんでいた徴であると言い、しかし胸に刻まれたイプシロンと十字架は希望の徴であるとの見解を示している。第一の解釈も第二の解釈もルフとリュコステネスに見えるものではある。リュコステネスは「いくつものイタリアの混乱と戦争のあとローマ教皇はラヴェンナを占拠した」⁴⁸としてイタリアの動揺を示し、ルフにも前掲のイタリアの荒廃への言及があった。イプシロンとXの解釈も同じように両者とも記述している。しかし両者ともこの解釈をそのまま受け取っていない。ルフはラヴェンナの怪物についての記述の最後に先述のイタリア荒廃の文を付け加え、この解釈を無効にしているように思われ、リュコステネスも別の解釈を持つ図像も存在するとして、二本足で胸にXとVの文字を持つ怪物像を掲げている⁴⁹。不思議なことに、ボエスチュオーの解釈は、セアールが指摘し⁵⁰、水野が翻訳している⁵¹、マルチウァリスの記述に符合する。マルチウァリスは次のように記していた。

「そしてこの悪徳のためにイタリアはかくも戦争の悲嘆に掻き乱されているが、フランス王がその力でなすのではなく、ただ神の鞭である。実際、イプシロンと✚は救いの徴である。というのもイプシロンは徳の図像であるから。それゆえに彼らが徳とキリストの十字架に戻るならば、この苦悩と苦難から逃れ休息と平和に出会い、動揺において望ましいものに出会う。それを聖別されしキリストはいつの時代にも与えようとされ給うであろう。アーメン」⁵²

ボエスチュオーが、リュコステネスが引用するマルチウァリスと言う以上、このテキストを直接見てはいないのだろうが、二つの文字をキリストによる平和の徴と解釈し、それを望む点では、これほどボエスチュオーの考えと一致するものはない。

以上やや詳細に怪物と徴、予兆の関係を検討してきたが、そこから見えてくるのは、ボエスチュオーは怪物に関してはリュコステネスの予言をあまり尊重していないことである。あるいは不信に思っていると言ってもいいかもしれない。ボエスチュオーはむしろ怪物の示す予言を別の目的のために利用しているように見える。それは近い時代の教皇批判のためであり、こうした批判は、紙幅の関係で詳論できないが、例えば写本の第22章の驚異的な饗宴でも明らかに見られたものであった。そこではユリウス二世の名が明記され、豪華な饗宴を行う様子が語

⁴⁸ Lychostenes, *op.cit.*, p.517. <Post uarios Italiae tumultus bellicos summus Pontifex Rauennam obtinuit.>

⁴⁹ *Ibid.*, 左側の図像。

⁵⁰ バレの『怪物と驚異』に付した注、*op.cit.*, p.153, n.18.

⁵¹ 前掲書、578 頁。

⁵² EVSEBII / Caesariensis Episcopi Chronicon : quod / Hieronymus presbyter diuino eius in=genio Latinum facere curauit / & vsque in Va=letem Caesarem Romano adiecit eloquio. / Ad. quem & Prosper & Mathaeus Pal=merius / & Matthias Palmerius / demum / Ioannes Multiuallis com=plura quae ad haec vsque / tempora sub=secuta / sunt / adiecere. HENRICUS STEPHANUS folio 175r^o-v^o. <Et propter haec vitia Italiam sic bellicis contritionibus quati. Regem autem Franciae non sua virtute id facere, sed solum esse dei flagellum. ypsilon vero et ✚ signa esse salutis : nam ypsilon figura est virtutis. Ideo si ad virtutem reccurant et ad CHRISTI Crucem : ab his pressuris & tribulationibus conueniat respirationem & pacem conquassationibus desyderabiliorem / quam dare dignent Christus in omnia saecula benedictus Amen.> シャンティ図書館蔵の1512年版で、google 上で公開されている電子テキストによる。

られ、しばしは貧困にあったペトロと対比された。しかしこうした言及は刊行本では削除されている。

驚異と徴、予兆との関係をまとめてみよう。ボエスチュオーは超自然的な原因の驚異はほぼ神の怒りの徴とみているが、自然的な原因によるものについては、驚異の徴、予兆としての価値をほとんど認めない。ましてや人為的な原因のものではそうした関係はまったく問題とならない。

ボエスチュオーの『驚異の物語集』では、従って、驚異の多くのものが、徴、予兆と関連付けられなくなっている。このことから、驚異を徴、前兆とするのではなく、拡大しつつあった博物学的な知識への関心や、ダストンとパークの言う <sports>「気晴らし」⁵³ として捉える方向へ変化しているとして理解することもできよう。

最後にこの集成の構成を簡略に検討しよう。章立てになっているので、各章の配列の問題と考えることもできる。さまざまな事象を扱うこの書は、カテルの言うように⁵⁴、カルダーノの『精妙さについて』や『事物の多様性について』のように、単純なものから複雑なものへという配列でもなく、リュコステネスの『驚異と怪異の年代記』のように年代順でもなく、ユリウス・オブスクエンスの『驚異の書』やヤコブ・ルフの『人間の懐胎と生殖について』のように論理的順番になっているわけでもない。それでは配列に何の配慮もなされていないのだろうか。これを検討するために、上記の印刷本と写本の章題の一覧表を見てみよう。

この表を一見するだけで、少なくとも次のことが確認できる。すなわち、第8章までは写本も印刷本も同じ配列であり、さらに、本文もほとんど変更されていない。また第37章以降は、写本になく新たに印刷本に加えられたものばかりである。このことからボエスチュオーは始まりと終わりに配慮をしていると思われる。この両端の間の第9章から第36章まで間では、章の配列の変更が行われ、五つの章が付け加えられている。

まず中間部の変更から見ていこう。この部分での章の順序の変更は、章の関連づけのためと思われる場合がある。写本でそれぞれ第13章、第17章、第15章であった洪水、噴火、地震の驚異の話は、印刷本では順に第10章、第11章、第12章となり、私たちの区分でいう天変地異としてまとめられている。しかしこうした関連付けはむしろ例外といえよう。人間の怪物の話は写本では11あるが、第5章、第6章、第7章、また第9章、第10章と連続していた。それが刊行本では第13章と第14章は連続しているが、ほかはかなり離れて配置された。こうしたものが示すものは、カテルが「多様性」といい⁵⁵、ジゼル・マチュー＝カステラーニが「交代」という⁵⁶、試みであろう。つまりこの中間部は話題を続けるよりは、変化をもたせようとしている。だがこうした多様性は何も話題の変化においてだけではない。中間部に追加された五章のうち四章は私たちの分類でいう博物誌に当たり、百科全書的カタログを構成し、ボエスチュオーの

⁵³ Daston & Park, *op.cit.*, p.200.

⁵⁴ Catel, *art.cit.*, pp.144-145.

⁵⁵ Catel, *art.cit.*, p.145.

⁵⁶ Gisèle Mathieu-Castellani, Préface, in Pierre Boaistuau, *Histoires prodigieuses*, Slatkine, © 1966, p.15.

こうした好みを反映するものであるが、同時に、第 31 章は別として、驚異的恋愛を扱う第 21 章も含めて、1560 年版でいずれも 15 ページを超える長い章になっている。また第 23 章も写本ではバアラという植物だけが扱われていたが、印刷本では様々な植物の驚異が付加され、20 ページ以上に膨れ上がった。ボオエスチュオーはこうした長い章の後には 4 ページ未満の短い章を配している。こうしてボエスチュオーは話題の種類だけではなく、章の長さにも変化を持たせ、読者を飽きさせないように工夫している。

冒頭の五章については、驚異の原因の検討の折にも見たが、一つのまとまりを構成していて、カステラーニはそこにボオエスチュオーの教育的意志 <volonté pédagogique>⁵⁷ を見ているが、私たちとしては寧ろ教化的と言おう。つまり驚異のあるものは神の怒りの徴で、戒めとしなければならないとの主張である。そしてこのような教化的意図は作品の末尾においても明白となる。第 36 章ではキリスト教徒に加えられた残酷さが語られ、第 37 章の人間と犬の姿をした怪物は、淫蕩の結果であった。第 38 章ではドナウ川の貧しい農民はローマの苛酷な課税を批判する演説を行い、第 39 章は貪欲を告発している。そして最後の第 40 章は、先に見たように、ラヴェンナの怪物を、教皇ユリウスの引き起こすイタリアでの戦争の予兆とすると同時に、キリストの教えに復帰することで平和が回復するだろうとの期待で書を終えている。

こうして最初と最後に意図をはっきりと表に出しており、その内容は終末論的な観点から、神の怒りの徴を読み取り、悔い改めよとの、キリスト教的呼びかけとなろう。最後にこのキリスト教的立場をもう少し掘り下げておきたい。ボエスチュオーの宗教思想に関して、バムフォースは批評版の序文において、ボエスチュオーの行動を主な論拠として、改革派的と見ている⁵⁸。私たちはこの問題を『驚異の物語集』のテキストの中で検討したい。

検討の場となるのは第 33 章の古代ユダヤ戦争で女が自分の子を食べる物語と第 36 章でのアスチアゲス王がアルパルスにわが子を食べさせる物語である。両者とも食人という極めて衝撃的な事件を扱い、しかもこの部分は本当の語りとなっており、ボエスチュオーの語り手としての腕の見せ所でもある。しかも両話ともボエスチュオーはすでに別の書でも取り上げていた。詳細は省くが、要はこの二人がわが子の肉を食べたという物語である。問題としたいのはその中に、「血」、「肉」、「骨」(HP.p.691, <c'est mon sang ! c'est ma chair ! c'est mes os> ; HP, p.710, <c'estoit sa chair, song sang et ses os>) という表現が出ていることである。ヨセフス・フラウィウスによる古代ユダヤ戦争の場合、わが子を喰らう女は、この言葉を『世界劇場』⁵⁹ では用いず、『驚異の物語集』の写本では食べてしまうわが子への呼びかけの折に用いられていた。⁶⁰ しかし印刷本ではこの言葉は、散々略奪したあとさらに肉の香を嗅ぎつけて強迫する兵士たちに対して発する女の科白に表現され、劇的な効果をいっそう挙げている。またアスチアゲスはア

⁵⁷ *Ibid.*, p.14. なおカステラーニは冒頭部以下の章に集められた例がこうした教育的意図の説明となると示唆しているが、私たちはこの論文で検討してきたことからして、この見解に与しない。

⁵⁸ Bamforth, *HP*, p.96 sq.

⁵⁹ Boastuau, *Le Théâtre du Monde*, Droz, 1981, pp.181-183.

⁶⁰ *HP*, p.688, variante.

ルパルスに自らの子の肉を、偽って食べさせ、食したのが、わが子の「肉、血、骨」であることをその父に認めさせるように残りの肉を皿にもったと『驚異の物語集』では語るが、同じ話を取り上げた『ケリドニオス・チグリヌスの物語』ではボエスチュオーはこうした言及はしていなかった⁶¹。こうしたこの言葉の扱いと、この書の印刷本以前には使われていなかった「良心の呵責」<remors de conscience HP., p691, p.709>が二つの物語に現われることを考え合わせると、この食人の物語は、正餐論との関連でとらえられるのではないだろうか。レストランガンはプロテスタントが教皇のミサを食人の儀式として告発したと指摘している⁶²。

1550年代リュコステネスは次々と驚異の書を世に送っていた。1552年『ユリウス・オブスクエンスの驚異の書』とポルドロ・ヴィルジリオ、ヨアヒム・カメラリウスの書との合本を出版したのに続き1557年には自身の『驚異と怪異の年代記』を刊行する。またヤコブ・ルフの『人間の懐胎と生殖について』（1554）、カスパール・ポイツァーの『予言の主たる種類についての注解』（1553）、カルダーノの『精妙さについて』（1550）と『事物の多様性について』（1557）などの医師、学者の書も現われた。さらには博物誌的な書、コンラート・ゲスナーの『動物誌』（1551－1558）、ピエール・ブロンンの『海の奇妙な魚の博物誌』（1551）、『鳥の性質の博物誌』（1555）、『魚の性質と多様性』（1555）、ギヨーム・ロンドレの『海の魚類の書』（1554－1555）、フックスの『植物誌』（1549）も同時代に次々と出版されている。ボエスチュオーはこうした書物を前にして、いつもの方法で自分の書『驚異の物語集』を作り出す。こうした書の「再利用」であるが、単なる剽窃ではなく、独自のものに再編成している。こうした書物から素材を借用しながら、histoireの持つ三つの意味、過去の本当のことを述べる歴史、筋の展開のある物語、さらには事の観察と記述に基づく人間の知識の部分、誌⁶³を兼ね備えた書を編み上げ、キリストの教えに戻るよう警告すると同時に、多様な物語を巧みに組み合わせ配列し、読者の知識欲に応え、飽きさせることのないように配慮し、フランス語で読者に提供した。読者の興味関心を引き、教え、心を動かすことに十分成功した書物を作り上げたと言えるのではないだろうか。

⁶¹ L'HISTOIRE / DE CHELIDONIVS / TIGVRINVS SVR L'INSTI- / tution des Princes Chrestiens, & origine / des Royaumes, traduite de Latin en Fran- / çois, Par Pierre Bouaistuau, surnommé / Launay, natif de Bretagne. / [...] / A PARIS. / Pour Vincent Sertenas, demourant en la rue neuue nostre Dame, / à l'enseigne S. Ian l'Euangeliste: Et en sa boutique au Palais, / en la gallerie par ou lon va à la Chancellerie. / 1559. / AVEC PRIVILEGE. f. 106 r^o-107 v^o. アルスナル図書館蔵で gallica 上で公開されている電子テキストによる。

⁶² Frank Lestringant, *Une sainte horreur ou le voyage en Eucharistie, XVIe-XVIIIe siècle*, PUF, © 1996, p.64.

⁶³ *Nouveau Petit Robert*, © 1993 の histoire の三番目の項目 : < La partie des connaissances humaines, reposant sur l'observation et la description des faits, et dont l'acquisition met en jeu la mémoire, opposé à la philosophie, à la science (objet de raison), à la pensée, aux beaux-arts (objets d'imagination).

Étude de Pierre Boaistuau (5)

Histoires prodigieuses 1

Yoshihiro KAJI

Les *Histoires prodigieuses* constituent la cinquième œuvre de Pierre Boaisutau, parue en 1560, mais il l'a déjà présentée sous forme de manuscrit à la reine Élisabeth d'Angleterre. À ce recueil, représentant le plus le talent de l'auteur, plusieurs autres auteurs comme Tesserant ont ajouté beaucoup d'histoires prodigieuses, et Boaistuau est considéré comme le fondateur du genre des <Histoires prodigieuses> en France.

Dans cet article nous souhaitons éclaircir les trois points suivants : la définition ou plutôt le contour de sens du mot <prodige> ; l'explication des causes de ces prodiges ; la composition du recueil ou la disposition des histoires.

L'auteur ne donne pas de définition nette du <prodige> , mais, incite plutôt à le prendre comme l'émotion suscitée par les choses extraordinaires, telle que l'<étrangeté> et l'<admiration> en particulier.

Boaistuau distingue trois causes de prodige: divine ou supernaturelle, naturelle et artificielle: à la première il reconnaît la valeur de signe et de présage, signifiant le plus souvent l'ire de Dieu; il a tendance à ne pas l'admettre, c'est-à dire pas de valeur de signe et de présage, pour les deux autres.

Le passage du manuscrit à l'édition en 1560 nous montre son intention sur la disposition des histoires. Boaistuau ne change pas les huit premiers chapitres mais ajoutent quatre nouvelles histoires à la fin du recueil. Entre les deux, avec le changement de l'ordre des histoires, il insère cinq chapitres très longs dont la plupart traite de l'histoire naturelle. Par ce procédé, l'auteur aborde une variété de sujet en longueur dans les chapitres du milieu, tout en gardant le caractère didactique du début et de la fin.

Ces analyses nous conduisent à reconnaître dans son écriture typique et répétée par le <<recyclage>> de diverses sources, la recherche de moyens pour plaire au public, l'instruire et l'émouvoir.